

がんの悩み電話相談室
 相談専用電話番号
086-264-7033
 相談受付時間/毎週土曜日(祝休日は除く)
 午後2時~5時

こんなことでお悩みの方の
 相談を電話でお受けします

がんと聞いて不安をもっている方
 ●
 ご家族や知人ががんでお悩みの方
 ●
 告知問題についてお悩みの方
 ●
 療養上のことでお悩みの方



がんの悩み

電話相談室

会報 Vol. **7** 平成15(2003)年12月

〈編集・発行人〉
 がんの悩み電話相談室 永瀬正己 ©
 事務局
 〒702-8058 岡山市並木町2-27-5
 Tel: 086-264-7875 Fax: 086-264-7875
 郵便振替口座 01290-2-10376
 ホームページ <http://www.ne.jp/asahi/okayama/gantele/>

死ぬならガンで



がんの悩み電話相談室
 室長
永瀬 正己

どうせ一度は死なねばならぬ。PPK(ピンピンコロリ)が最も望ましいと考える日本人が最多であろうが、私はガンで死にたい。笑われるかも知れぬが、理由は次の如し。先ずあと幾ヶ月で最後を迎えるのか予想が出来ることで、突然死より準備期間が与えられること、人生を何とかその間に完結する用意が出来ることである。遺言状も生前発効遺言状(リビング・ウィル)も既に書いてあるが、矢張り身の回りに未整理の事項はついて回る筈。PPKとなると少々困惑するであろう。延命医療はお断り。ガンの肉体的疼痛だけでなく、社会的・精神的・霊的疼痛に対応可能の自信は、何とか九十歳を前にして出来上がっていると愚考している。そして成るべくならば自宅で最後を迎えたいのは皆様と同じ気持ちである。

がんの悩み電話相談室は平成八年九月に開設し、電話相談事業、ボランティア養成講座事業など内容の充実に努めながら継続実施しております。がんの患者と家族のためのクラブ「並木ひろば」も平成一二年二月に開設し継続実施しています。このような事業を通して患者さんやご家族の不安や悩みを少しでも受け留めることができ、自ら治療の方向性を選択できるような事業を継続したいと思っております。ご賛同いただいた会員の皆様ありがとうございます。また当室事業は平成一三年度から本年度まで「赤い羽根ボランティア・NPO育成支援事業」助成を受けました。記してお礼申し上げます。

- | | | |
|--|---|--|
| <p>《正会員A》
 永瀬正己
 赤木清美
 明石満寿子
 石原辰彦
 伊藤恭子
 伊藤俊雄
 大橋輝久
 岡崎壽子
 岡本和恵
 加賀美智子
 香川優子
 片岡典子
 加藤恒夫
 北村吉宏
 木村秀幸
 斉藤信也
 皿海二子
 下妻晃二郎
 鷹取弘子
 竹田孝三
 多田隆子
 達野克己
 田中紀章
 津田敏秀
 徳田智代
 富田茉莉子
 難波澄子
 橋本真紀
 日浅喜久子
 福岡英明
 福岡啓祐
 福田柳子</p> | <p>堀井茂男
 元宗佐和子
 森本接夫
 山本 力
 和氣一栄
 渡辺治子
 《正会員B》
 青江信男
 秋山和恵
 網本優子
 石井清子
 井上チズ子
 宇野 傑
 江口夕子
 大島史子
 太田尚子
 大塚栄次
 大塚久美子
 大野幸恵
 岡崎加住子
 可兒義朗
 北 昭子
 北 徳
 小林真澄
 最相初音
 白神由美子
 高橋由起恵
 竹内教子
 立石真理
 田中弘子
 田中由紀美
 谷本和恵
 為季治子</p> | <p>土井利勝
 徳永千栄子
 頓宮保栄
 長安つた子
 難波由美子
 西井和枝
 額田征子
 馬場美江子
 林 寿
 原田淑子
 人見裕恵
 平松由里子
 藤原恭子
 文屋敦子
 三村了子
 宮岡京子
 横山幸生
 横田貞子
 横田裕子
 渡辺永子
 《賛助会員》
 オートバックス
 共済会
 《助成》
 赤い羽根ボランティア
 NティアNP
 O育成支援事業
 から助成</p> |
|--|---|--|

電話相談事業の概要

(開設平成8年9月～平成15年3月末)

相談件数：計543件

相談時間：平均22 (±13.6) 分

性別構成：相談者；男性149名、女性394名
患者；男性253名、女性274名他

住所構成：

	岡山市	倉敷市	玉野市	津山市	その他	県内計	県外計	不明
相談者	157	55	20	17	68	317	68	158
患者	133	52	18	17	65	285	89	169

図1 相談者と患者の関係 (全543件)

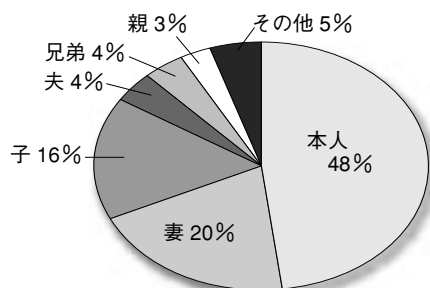
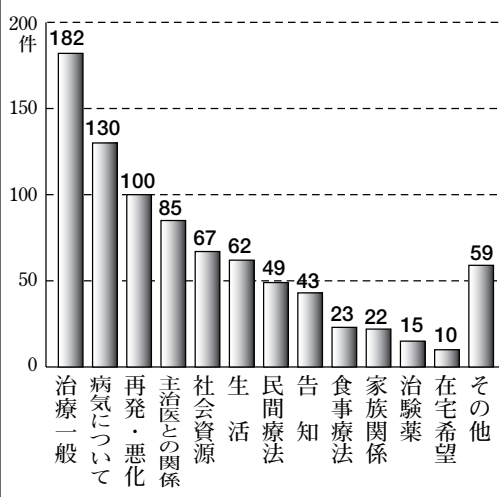


図2 相談内容 (全543件、重複回答)



●がんの悩み電話相談室総会

平成一五年四月一九日に開催し、平成一四年度事業・会計報告、平成一五年度事業計画・予算など審議了承されました。

●がんの悩み電話相談事業

毎週土曜日午後二～五時の三時間実施しています。相談員は当室実施の「電話相談ボランティア講座」修了者で、医療関係者、ソーシャルワーカー、会社員、公務員、主婦等、様々な職種ボランティア相談員が交代で一回三名体制で担当しています。

●電話相談事業の概要

相談件数は平成八年九月開設以来、同一五年一〇月末で六二七件、利用は増加傾向にあります。相談内容の分析は平成一五年三月末で別表のとおりです。

●教育研修部会事業

●電話相談員の研修

月一回二時間程度定例の勉強会、「聴き方について」「がんの各論」などの研修を行っています。また、関係機関の実施するがん関係の講座・講演及び当室実施の「ホスピスボランティア養成講座おかやま」な

どに参加、相談員の資質向上に努めています。

●「一般の方々を対象」

「ホスピスボランティア養成講座おかやま」基礎講座第Ⅶ期(表1)を開催し、がんの正しい知識やよりよい終末期医療・看護・介護のあり方などの内容で実施しました。受講者／一八六名、修了者／一四六名、当日のみの受講者／一八名

●基礎講座修了者対象

「電話相談ボランティア講座」(表2)を開催して一四名受講し、一月一五日修了式を迎えました。この内一二名が「電話相談員」に応募し、当室教育研修部の審査を経て活動予定です。

●電話機器・研修用録音機器整備

平成一五年度「赤い羽根ボランティア・NPO育成支援事業」助成(助成額三〇万円)を受け、電話機器・研修用録音機器を整備しました。

●電話機器

相談専用電話回線の増設へ向けて相談専用電話機、自動通話録音装置、コールセンター各一式を購入設置し、相談通話の環境整備(自動車騒音など環境騒音対策と通話のハンズフリー化)を目的としてハンズフリーヘッドセット・アンプ二式を購入設置、

今年のお盆のこと

土井 利勝

例年のお盆休みは、実家に帰省し、お墓参りなどゆつたりと過ごすところだが、今年は一転、自宅の引越となり、慌しい毎日となった。暑い中、整理した粗大ゴミを西大寺のリサイクルプラザに持ち込み、帰りに隣接するリユースプラザでリサイクルされた展示物などを見て、一息ついていた時に、一冊の本を目にした。河野博臣さんの「患者の心医師の心」だった。

新書版サイズで一二〇ページ余りの目立たないその本は、昭和五六年発行で定価三四〇円とあった。この書棚に並べられた本は二冊まで持ち帰ることができるが、居並ぶ本の中に隠れるように潜んでいたその本を、私は迷わず持ち帰った。

忙しい引越しの合間を見て、携行するのも煩わしくないその本を一気に読んだ。落ち着いてから、気になる箇所にはアンダーラインなど引きつつ丁寧に読み返すと、どの文章も胸に刻んでおきたい珠玉のことで満ちていた。今の自分に足りない視点を平易に論ざれている気がした。

本が発行された昭和五六年といえは、私は高校三年生で、母が子宮がんで他界した年である。本の中の言葉と母を看病する当時の私と、そして医療関係者の姿とが重なった。いや、重なったと言うよりは、河野さんの字面に籠められた「死の臨床」への理念と、実際にはかけ離れていた同時代の病棟での所業に思いを巡らさざるを得なかった。「死をひかえた末期の患者さんに必要なのは治療ではなくて、配慮」(七頁)、「患者さんを見る場合でも病気をみるのではなく、その人を全体としてみる、病気をもらった人間の全体をみるこれが大切」(九頁)、「人間の一生というはこの世の中に生をうけて、本当に自分であるということをご世の中で実現していく過程です。……死というものをそういうふうにご自己実現の極としてとらえるべきであって……」(五九頁)等々。

だが、巡る思いと共に胸に去来したのは、医療関係者への疑念ではなく、死を前にした母にどこ

表1 ホスピスボランティア養成講座おかやま
基礎講座 第Ⅶ期 (平成15年1月～同年6月)
(平成14年度「赤い羽根ボランティア・NPO育成支援事業」助成を受け実施)

	テーマ	講師
1	開講式・医療の理念	永瀬正己室長
	ホスピスの現場から ——患者さん、ご家族との対話	岡田美登里 岡山済生会総合 病院緩和ケア病棟看護主任
2	癒されるかわかり《公開講座》 ——ホスピス病棟の毎日から	沼野尚美 六甲病院チャプレン
3	がんの治療 《公開講座》 ——前立腺がんを中心として	朝日俊彦 香川県立中央病院泌尿器科部長
4	在宅での看取り ——地域で支える	神代尚芳 おおくまりハビリ病院院長
5	がんの症状コントロール	加藤恒夫 かとう内科並木通り診療所
6	がんの患者さんの思い ——患者さんと共に	堀井茂男 慈恵病院 当相談室教育研修委員
	閉講式	永瀬正己室長

表2 ホスピスボランティア養成講座おかやま
電話相談ボランティア講座 第Ⅶ期 (平成15年7月～同年11月)

	テーマ	講師
1	開講式	永瀬正己室長
	電話相談の基礎Ⅰ ——聴くこと	赤木清美 当相談室教育研修委員
2	電話相談の基礎Ⅱ ——聴くということ	北村吉宏 岡山療護センター 当相談室教育研修委員
	3	電話相談の実際
4	がん治療の実際 ——肺がんを中心として	玄馬顕一 岡山労災病院呼吸器内科部長
	5	再び聴くということ
閉講式		永瀬正己室長

今年はいわばクラブの社会への参画ともいえるべき活動が加わりました。講演を聴いたり、メンバーだけで話し合ったりするだけでなく、クラブ員自身が社会へ発言する機会をもつことができたのは意義あることだと思われました。また、会報「並木ひろば」の発行回数を増やして、編集を当番制にすること等も発信の機会が増えてゆくものと思えます。

津山のクラブの皆さんともお互いに支え合って進んでゆきたいです。小さな「クラブ」があちこちに生まれて、同じ悩みを抱える人々が気軽に相談し合ったり、情報交換したり、時に楽しい一時をもてるようになってほしいなあと思っています。

さて、今年の忘年会はどうなるでしょうか？ 楽しみです。

(文責・香川)

一月より使用を開始しました。
《研修用録音機器》
研修用の使用を目的として、カセットレコーダー五式と電話録音アダプター一式を購入し電話相談ボランティア講座受講者のロールプレー演習、相談員研修などに活用しています。

●がんの患者と家族のためのクラブ「並木ひろば」活動報告
平成一五年一月～一二月のクラブ開催回数三六回、延べ参加者数一八四名。
毎月第三土曜日の定例会に加えて、左記のような研修及び活動を行いました。
二月一五日 沼野尚美先生(チャプレン) 講演会
五月一八日 「松江 生と死を考える会」 講演会・公開定例会
六月二一・二二日 さんかく岡山フェスティバル参加。「がんはこわい? こわくない?」講演会・公開定例会
九月二〇日 岡山済生会総合病院緩和ケア病棟開設五周年記念講演会

一月一五日 津山「談笑会」との合同定例会
二月七日 忘年会(宿泊)

五月は「松江生と死を考える会」の招きで、メンバーの北出さんの講演「癌と共に生かされて五年」と、私たちのクラブ定例会を松江で公開しました。メンバーの何人かは、参加者から相談を受けたり、手紙を頂いたりしました。忙しい日程でしたが、「松江生と死を考える会」代表の清水さん、会員の皆さんの計らいで、松江城の「そば」でおいしい「そば」をご馳走になって、一同満足、満腹の一日でした。

六月には、岡山市の男女共同参画事業である「さんかく岡山フェスティバル」に参加しました。主催者との考え方の違い等もあり、担当者にクラブに来て頂いたり、展示の準備等大変でしたが、そこはチームワークの良いメンバーです、それぞれ得意の分野で活躍しました。公開定例会には、時間が早かった為か、参加者が少なくてちよっと残念な気持ちでしたが、クラブのメンバーと参加者の皆さんがコーヒを飲みながらいつもの会に近いリラックスした公開定例会となり、かえって良かったのかも知れません。展示会には、

自分も拱手傍観していたのではないかと苦しい洞察だった。
それから数日たった八月二二日の朝刊で河野さんが亡くなられたという記事を目にした。
実は、河野さんには一度だけお目にかかったことがある。平成十一年六月のホスピスボランティア養成講座での講演会だった。
三十代の外科医として自信満々であった時期に四回も腸閉塞手術をして治らなかつたご婦人の患者は、実は精神面が原因で病気を繰り返していたことに気づき、それが医者としての転機になったという講演会でのお話はとても印象深かった。この転機に纏わるお話は、本の中でも「心を開く」というテーマで書かれていた。「そのご婦人は今、自分の心を開いて話し始めたわけですが、この場合、治療者としての私、またその夫が患者のいうことを十分に聴くということが最も大切なことです。今の医療の中で忘れられているのは、この「聴く」ということです。」(一九頁)

さて、私は治療者ではないが、一介の相談員として電話をとる度に、この「聴く」ことの難しさを思い知らされている。河野さんは腸閉塞手術の失敗を転機とし、治療者として、終生「死の臨床」のあるべき姿を追求された。河野さんの死に際して、私も母に対し拱手傍観していたということを転機にしてもいいのではないかと思った。援助者として、「聴く」ことの大切さを礎に、今の自分のできることをやってみよう。旅立たれる前に、河野さんがこの本を私に手渡してくれて、そんな思いを新たにすることができた。これは、かなり勝手な思い込みではあるが、自分にとっては、忘れえぬ、掛け替えのない今年のお盆の「出来事」となっている。

